

基地都市コザにおける門前商店街「ゲート通り」 の店舗構成とその特色

加藤 政 洋

この町はほそながい町だよ。日向にでてきたみみずに蟻がたかるみたいに、軍用道路に土地をなくした住民が、しゃぶりついてできた町だよ。

(東峰夫『オキナワの少年』¹⁾)

I はじめに

(1) ゲート通りの「道じゅねー」

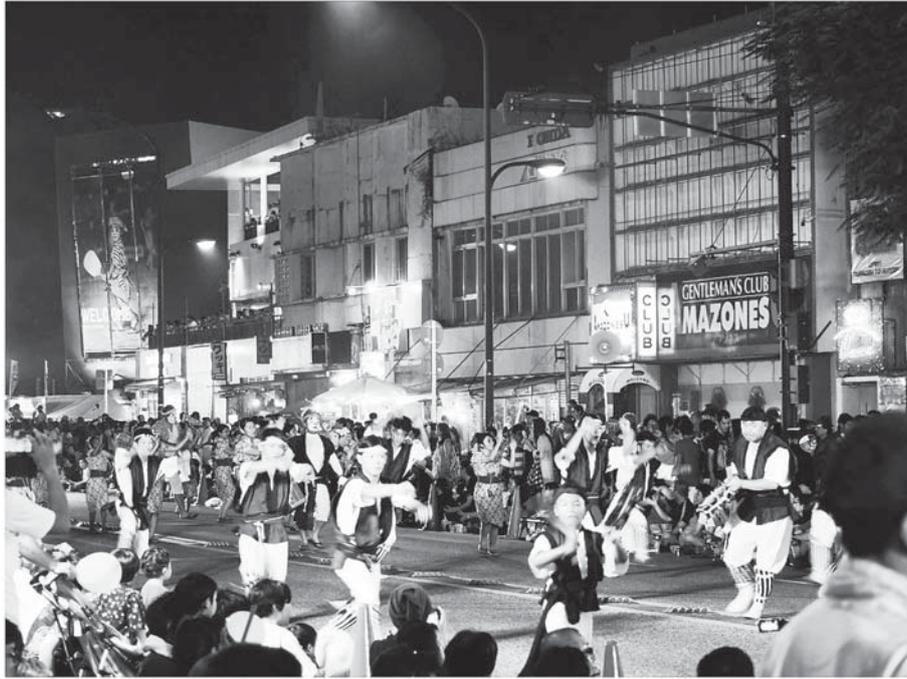
沖縄島中部に位置する沖縄市は、毎年、旧盆の翌週末に県内でも最大規模となるエイサーのイベント、「沖縄全島エイサーまつり」を開催している²⁾。旧コザ市時代の1956年にはじまった「全島エイサーコンクール」を前身とするこのイベントは、2017年で62回を数えた。沖縄市は2007年6月に「エイサーのまち」を宣言し、エイサー文化の継承のみならず、エイサーをモチーフにしたさまざまな取り組みを展開している。

「沖縄全島エイサーまつり」の目玉のひとつに「道じゅねー」がある。本来、各集落の通りを練り歩く演舞の形態を指す言葉であるが、この祭りでは市街地の幹線道路を派手に行進するのだ。国道330号を練り歩いた参加団体（各字の青年団）は、最後、ゲート通りと呼ばれる街路に至り、仕舞の演舞を披露する。自動車交通は時限をもって禁じられ、ふだんは往来の激しい道路の真ん中が舞台となる（第1図）。道の両側には観客が詰めかけ、簡易な出店では飲料（ビールや泡盛）と軽食（唐揚げやポテト）が販売されることから、さながら縁日のような雰囲気となる。場所柄、外国人の家族やカップルも多い。

印象的なのは、背景となる道向こうの建物である。往時のおもかげを多分に残す、派手な外装をまとったクラブの店舗が立地しているのだ。ゲート通りとは、その名のごとく、嘉手納基地の第2ゲートへとつづく街路であり、同基地がベトナム戦争の「最前線」となった時期には、米兵であふれかえる歓楽的な要素の色濃い商店街となった。この点でゲート通りは、基地のゲート前に形成された特異な「門前町」であったといってよい。

(2) 門前商店街としてのゲート通り

一般に門前町とは、寺や神社の「門前」に形成された町場（都市）を指す。江戸期の物見遊山の流行にともない、参詣客や旅人を相手にする茶店や旅宿、あるいは土産品店などが建ち並んで、歓楽を含む商業的な街区が成立したのだった³⁾。善光寺の小規模な門前町から県庁所在都市となった長野市や、京都の祇園社（八坂神社）の東楼門前に成立した花街「祇園町・祇園新地」など、その空間



第1図 ゲート通りの「道じゅねー」
(2015年9月4日撮影)

形態はじつに多様である。

門前町の成立や形成過程をめぐる歴史地理学的な研究は、1960年代以降、さかんに取り組まれてきた。初期の成果としては、藤本利治『門前町』⁴⁾や原田伴彦「近世門前町研究序説」⁵⁾などを挙げることができるだろう。また、須山聡「富山県井波町瑞泉寺門前町における景観の再構成」以来⁶⁾、近年では「まちなみ」や景観などに焦点をあわせた、まちづくり論や観光研究も活発化している。

研究史を概観すると、調査・研究の対象は一貫して、オーソドックスな意味での「門前町」が多い。だが、現実の都市地理から観察されるのは、寺院や神社にかぎらず、ある特定の機能を有した空間の「門前」に集積する産業もあるということだ。

たとえば、大規模工場の門前を挙げることができるだろう。神戸市の旧湊川河口部を埋め立てた土地に立地する川崎重工業神戸工場などは、その典型である。湊川の旧河道は、工場のゲートへ通ずる直線道路となっている。天井川の痕跡を随所に残す道路の両側とその周辺には、かつて工場労働者の利用する飲食店が建ち並んでいた。

あるいは、大学の校門前を中心に商業地区が形成されているところもあるし、美川憲一の「柳ヶ瀬ブルース」(1966年)に歌われた岐阜市の柳ヶ瀬、大阪市の遊興街「新世界」から南へのびる飛田本通商店街、そして京都市の西本願寺の西側に位置する嶋原商店街は、いずれも旧遊廓の門前に成立した商店街である。

このような事例をふまえ、神社仏閣に限定することなく「門前町」の概念をいくらかひろげてみるならば、嘉手納基地第2ゲートに通ずるゲート通りに面した商業地区も、ある種の門前商店街として捉えることができよう。本稿は、手法を(商業地理学を含む)先行研究に学びつつ、米軍基地の門前という特異な空間性も十分考慮に入れて、ゲート通りの店舗構成を復原するとともに、その特色を明らかにするものである。

考察の対象とする時期は、米軍統治下にあって基地の影響をもっとも強く受けた1950年代から

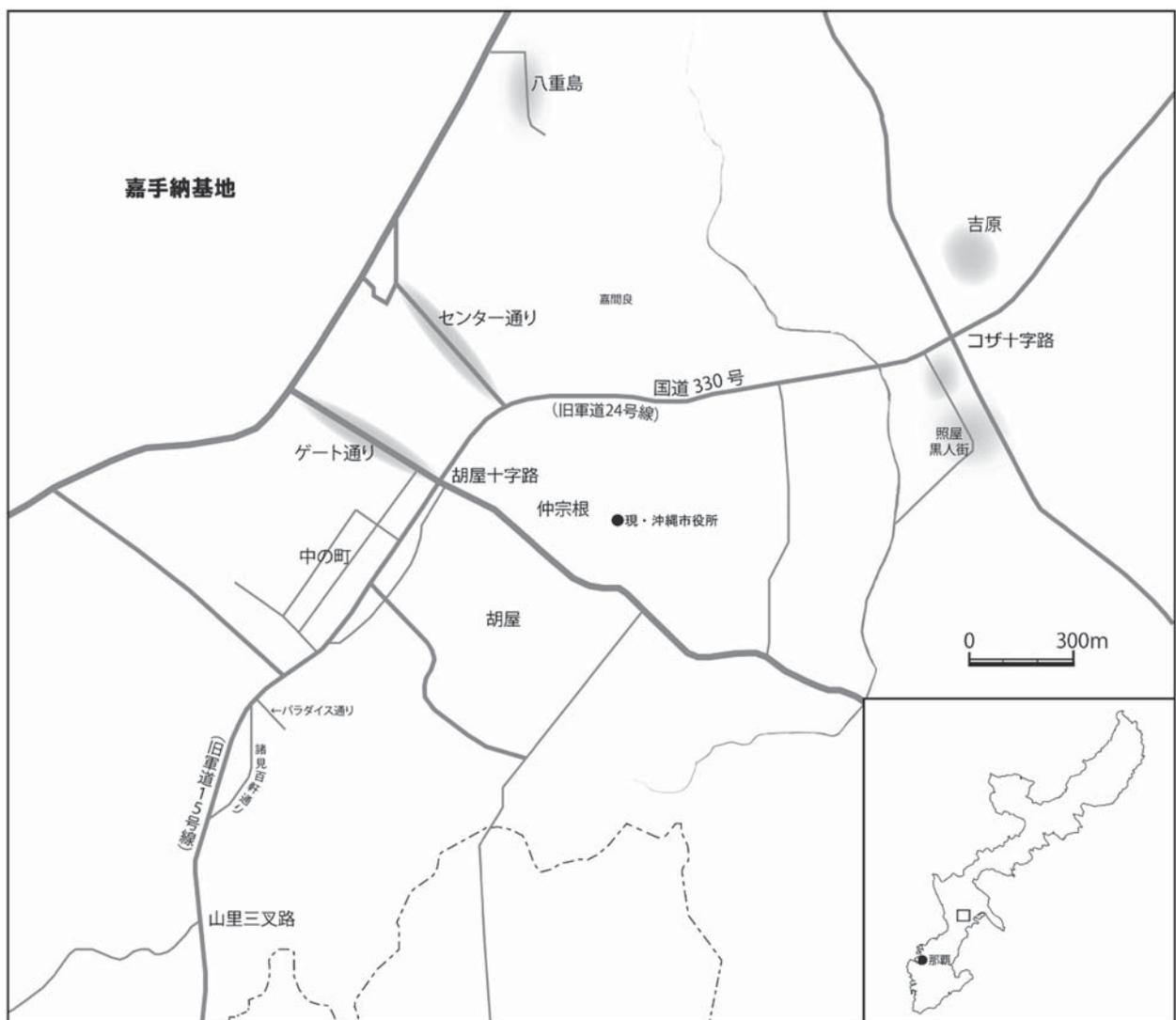
1970年代前半である⁷⁾。沖縄市は、本土復帰後の1974年にコザ市と美里村（当時）とが合併して成立した市であり、以下、本稿では対象とする時期の地名ないし基地都市を表象する語句としてコザをもちいる。

II コザの商業環境

(1) 商業地の分布

第2図に示したとおり、コザの市街地は国道330号（旧軍道15号線・24号線）の沿道に形成されており、おおむね山里三叉路から諸見まで、胡屋十字路、そしてコザ十字路を中心とする商業ブロックに分立している。これらの商業地区は、いずれも1950年代初頭のいわゆる「恒久的な基地建設」に随伴して形成されたものであり、コザはまさに〈基地都市〉を具現する空間であった⁸⁾。

『中部商工名鑑1962年』⁹⁾の「コザ市の展望」によると、「商工都市コザ市は基地を背景にいまもなお三つのブロックに分けられ」とし、諸見、ゴヤ十字路、コザ十字路の各ブロックが簡潔に紹



第2図 対象地域の概観

介されている。具体的には、「コザ市の表玄関」と位置づけられる諸見ブロックには、「スーベニヤ、バー、レストランなどが二十四号線をはさんでひしめき合い」、当時、コザ最大のキャバレーもオープンしていた。くわえて、諸見中央・島袋という二つの市場や、映画館（島袋琉映）も立地していた。現在でも沖縄市のヘソとなっている胡屋十字路は、次のように説明される。

コザ市の心臓部はゴヤ十字路一帯である。別名ビジネス・センターともいわれ、市役所をはじめ警察署、コザ病院、金融関係、商店の支店、支社、娯楽施設、バー、キャバレー飲食店、質屋、レストラン、喫茶店とあらゆる業者がひしめいている。アチラさん相手の業者が殆どで盛り場は夜ともなれば一大不夜城となる。¹⁰⁾

このように胡屋十字路一帯は、センター通りと近接して都市中心をなしていた。

他方、コザ十字路は「黒人街として結構繁昌している」ことが大きな特色であるとされ、「料亭あり、映画館あり、銀行あり、遊技場あり、バー、キャバレーありで〔、〕街は土曜、日曜、ペーデーともなれば黒人達で賑わう」と紹介されている。そこに、この十字路の「もう一つの特徴」である「十字路市場」があいまって、「一部の黒人街を除けば庶民の街としてコザ市の重要商業地域となって」いた。

第1表は、主要な商業組合を設立年順に整理したものである¹¹⁾。戦後の沖縄では、商業団体名を「～通り会」とすることが多い。嘉手納基地の建設が本格化した1950年以降の約10年間で、おもだった商業地区が形成され、組合を組織していたことがわかる。嚆矢となったのは十字路市場で、八重島はコザ（旧越来村）における最初の都市計画的な枠組みのなかで1950年に開発された米兵向けの歓楽街であった¹²⁾。その後、1956年7月の市制施行前後に、相次いで市内各所の商店会が結成される。

第1表 商業組合の設立年

設立年	商業組合	備考
1952	十字路市場商業組合	後にコザ十字路市場組合
1953	八重島通り会	
	センター市場組合	『沖縄タイムス』1952年1月16日
1955	センター通り会	
1956	胡屋通り会	胡屋大通り会（『琉球新報』1953年12月27日）
	諸見通り会	『沖縄タイムス』1954年12月23日
	コザ十字路本町通り会	
	エアベース通り会	
1957	室川通り会	室川通り団（『琉球新報』1954年12月14日）
1958	コザ十字路通り会	『沖縄タイムス』1956年8月7日
	コザ高通り会	後に新橋通り会
1959	ゴヤ中央市場組合	
1960	中の町大通り会	
1961	諸見南部通り会	
	諸見北通り会	
	諸見旧道通り会	諸見百軒通り会（『琉球新報』1962年11月1日）

『通り会関係書類 1961年度～1963年度』などにより作成。

(2) ゲート通りの名称

本稿で対象とする「ゲート通り」もまた、1956年7月15日、「エアーベース通り会」を発足させていた（会員90名）。名称は「エアーベース通り」が選択されたものの、その直前までの仮称は「嘉手納航空隊ゲイト通り会」であったという¹³⁾。

結成にあたっては、「国際空港／空軍部隊」（＝嘉手納基地）の「表玄関」にあたることから、「通りの衛生美化」や「品位の向上」が目指され、さらに「各業者が団結して街を汚す一切のものを駆逐する」という強い文言も、目的のひとつとして盛り込まれた。その背景には、付近で増加する街娼の問題があったようだ¹⁴⁾。特定の地区や店舗への軍人の立ち入りを全面的に禁じる「オフ・リミッツ」が警告されていたのである。市制の施行という祝賀的側面のみならず、基地と連関した社会経済のポリティクスも商業活動の重要な次元であった。

名称に関して言えば、なぜか「エアーベース通り（会）」が定着することはなかった。『沖縄市史第九巻 戦後新聞編』（CD-R）をもちいて広告記事などを追跡すると、「エアーベース通り会」が最後にあらわれるのは1961年8月24日付の『中部情報』である。その間も、「ゲート（ゲイト）通り会」という呼称が1958年に登場し、1962年以降は頻出するようになる。街路名としての「（第二）ゲート通り」という表記（呼称）が、店舗案内その他では一貫してもちいられていたこともわかる。結果として1960年代を通じて人口に膾炙したのは「ゲート（ゲイト）通り」であり、正式な通り会名は曖昧となった。

(3) ゲート通りの空間性

夜のとばりにアカ、ミドリ、ムラサキ、アオ、キーのネオンがコントラストをなして幻惑の世界をつくり出し、外人客がこれを求めて姿をあらわした時、コザ市は“外人街”のふん囲気を強め、国際観光都市のイメージが強烈に浮き上がる。アメリカ、メキシコ、フィリピン、インド、中国、韓国と人種もさまざま。¹⁵⁾

センター通りと並んで、夜のネオンサインに象徴されるコザの都市景観を具現したのがゲート通りである。Iでは、ゲート通りをある種の門前商店街として位置づけておいたが、その空間的種別性についてはあらためて吟味しておく必要があるだろう。

神社仏閣の門前町は、参拝者や観光客をあいてとした店舗からなる。工場や大学にしても、門前町の客層は通勤・通学をする従業員や学生たちにかざられるだろう。前者はおもに非日常的な行動であり、後者は日常生活そのものという違いがあるものの、どちらも施設が目的地であることにかわりはない。ところが、ゲート通りの場合、客層の詳細は後述するが、そのほとんどが基地の内部からゲートの外に出てきた軍人たちであった。買い物をしたり、サービスを受けたりした後、彼らはゲートのなかへと戻っていく。

コザの市域全体が門前町のようになった最大の要因は、コザ側の地理的条件ではなく、むしろ基地内部の土地利用にあったことも忘れてはなるまい。嘉手納基地（Kadena Air Base）は、総面積約20km²、全長3,700mにおよぶ滑走路を2本備えた、極東最大のアメリカ空軍基地である。1943年9月から日本陸軍航空本部によって建設された飛行場を、米軍が1945年の上陸後に接收して拡張・強化し、現在に至る。基地の範囲は沖縄市・嘉手納町・北谷町という1市2町にまたがり、フェンスで

仕切られた域内には、「滑走路、駐機場、飛行機、格納庫」などが主として嘉手納・北谷側にある一方、沖縄市側には「軍人、軍属、家族の生活の場として、兵舎、家族住宅、病院、ショッピング、スポーツ、娯楽、保養の諸施設が完備され」、さながら「ひとつの都市を形成している」かのようであった¹⁶⁾。

ポイントは、基地内部の土地利用が空間的に分割されていたことである。すなわち、北西部（嘉手納町側）に滑走路・駐機場・格納庫などの軍事施設が配置される一方、南東部（コザ側）には家族住宅や兵舎を中心に、ショッピングセンターや娯楽・保養施設が立地している。第2ゲートに近い南東部は、軍人とその家族の生活空間そのものであった。したがって、嘉手納基地には5つのゲートがあるものの、軍人・軍属とその家族が主に通行するのは、住宅に近接する第2ゲートということになる。

このようにみえてくると、嘉手納基地内の土地利用が、コザという空間を商業都市として編成したといっても過言ではあるまい。その第2ゲートに通じるゲート通りは、おのずと開口部としての性格を景観に映し出すだろう。

Ⅲ ゲート通りの店舗構成

(1) 店舗の復原方法

本稿で基本資料とするのは、沖縄県公文書館の所蔵する『事業所基本調査調査票』（コザ市、7分冊）ならびに『事業所基本調査事業所調査票』（コザ市、7分冊）である。前者には、琉球政府企画局統計庁が1970年8月に実施した「事業所基本調査」の「調査区要図」と「調査対象名簿」とが含まれる。手書きの地図である「調査区要図」には、事業所の位置を示す番号が書き込まれており、それらは「調査対象名簿」に記載された番号と符合するので、各事業所の立地をある程度まで把握することができる。「調査対象名簿」には、事業所名、事業主名、所在地、事業の種類、経営組織、本所・支所の別、常用雇用者数などが記されている。

他方、後者の『事業所基本調査事業所調査票』は、「事業所基本調査」の実際の個票を7冊に分けて綴ったものである。内容は『事業所基本調査調査票』の情報にくわえて、事業主の国籍のほか、営業種目（商品・サービスなど）の上位3点、開設時期、販売先などが記されている。ここでは、別稿でもちいた手順にしたがい、ゲート通りに立地した店舗の構成を建物別の図と表で復原した¹⁷⁾。

これまでゲート通りに関しては、重要な先行研究として、波平勇夫の論考がある¹⁸⁾。「1977年空港通り町並みとその後の営業期間」と題して、ゲート通り（2006年当時は空港通り）の店舗が簡条書きのような形式で列挙されている。典拠となった資料は、『産業住宅地図』である¹⁹⁾。注意しておくべきは、「住宅地図」類は一般的に目視にもとづいて作成されており（当然ながら誤認が起こる）、当時は表記法も未発達であったという点である。そのため、「住宅地図」をもちいる際には十分な注意と資料批判とが必要になる。本稿では「調査区要図」を基本資料としつつ、発行年を異にする「住宅地図」も参照しながら、必要に応じて現存する建物も確認し、建物内部の用途区分について表記した。

以上の手法にもとづき、ゲート通りに立地した店舗（事業所）を復原したのが、**第3図**である。図の縦方向（建物の間口）に関しては、おおむね縮尺に対応している。この図に対応する文末の付表も

作成した。図と表の番号は対応している。図の範囲に立地した店舗は西側に 66 件（不明・不詳を含む）、東側に 58 件（不明・不詳を含む）の計 124 件であった。あわせて、主要な店の位置を 1970 年 5 月 12 日琉球政府撮影の 10,000 分の 1 空中写真（国土地理院番号 MOK701-C2-7）にプロットした（第 4 図）。

なお、第 3 図の（ ）内の店舗に関しては、「事業所基本調査」の名簿に記載がなく、その他の資料から補足している。たとえば西 25 の「CLUB DIAMOND」は、『沖縄タイムス』（1965 年 8 月 5 日）に新規開店の広告が掲載されており、『琉球新報』（1970 年 7 月 5 日）の記事中の略地図にも店舗名が記されていることから補った。ただし、営業実態は不明であるため、分析からは省くこととする。

なお、ゲート通りは軍道 24 号線（国道 330 号）から北西方向に延びる街路であるが、事業所の立地を示す際には、道路を挟んで西側を西、東側を東というように、便宜上、四方位で表記している。

(2) 業種の特徴

1970 年の「事業所基本調査」ならびに事業所の立地を復原した第 3 図にもとづき、業種別の店舗数をまとめたのが第 2 表である。これによると、件数は飲食店、衣料品関連、時計・質店、理容・美容店、土産品店とつづく。

以下、順を追って、それぞれの特色についてまとめておきたい。

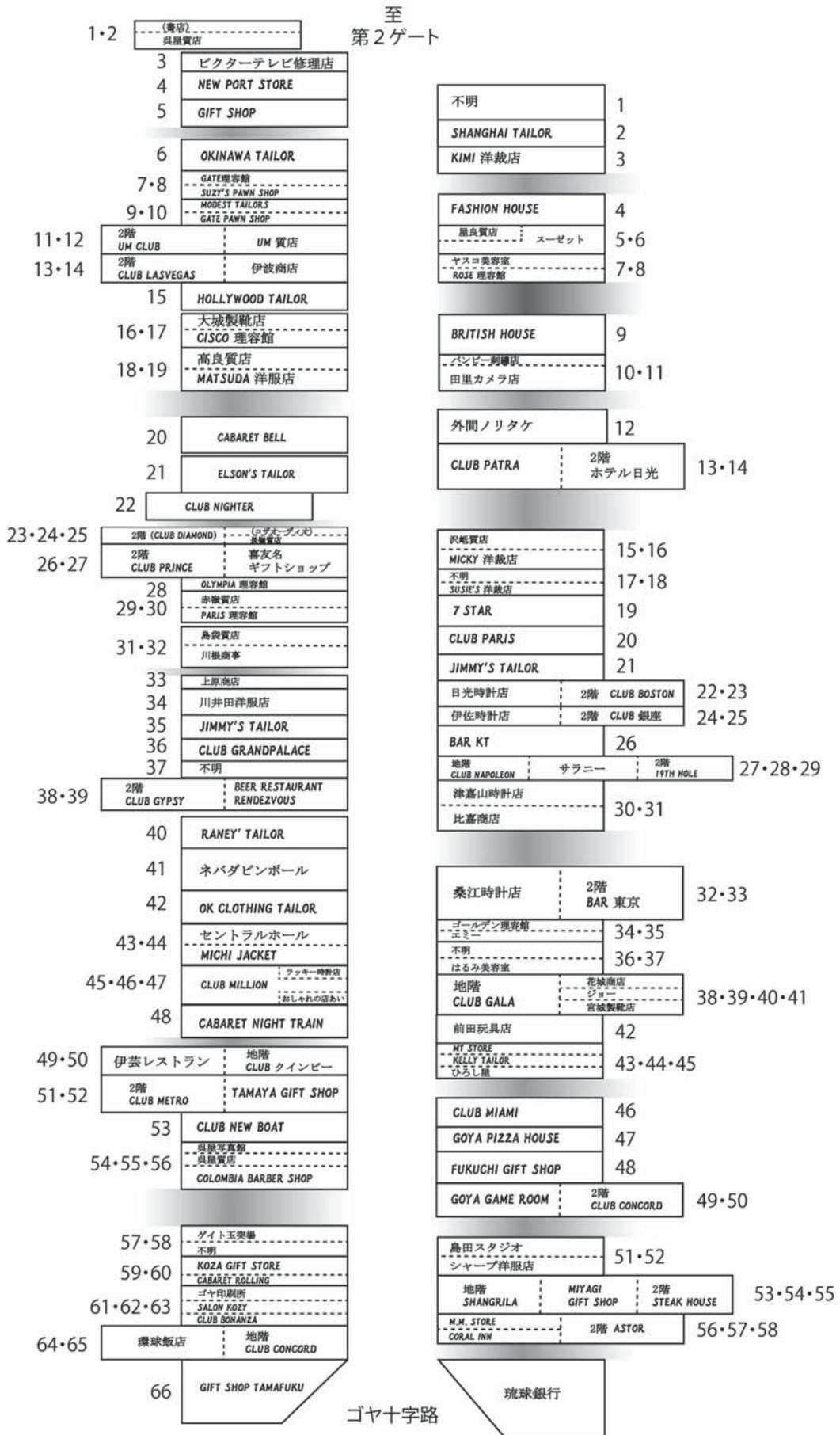
[飲食店]

「米軍基地依存経済の象徴」²⁰⁾——それが、「A サイン業」と総称される²¹⁾、米軍の厳しい管理下に置かれたクラブ（キャバレー）やバー、そしてレストランなどの飲食店であった。「100%米軍人、軍属相手の町、コザ市センター通り、ゲート通りの業者」²²⁾と指摘されるように、ゲート通りに立地した 28 件のクラブ・バーのうち『事業所基本調査事業所調査票』に記載のない店舗をのぞくと、すべて外国人顧客率が 100%であった。

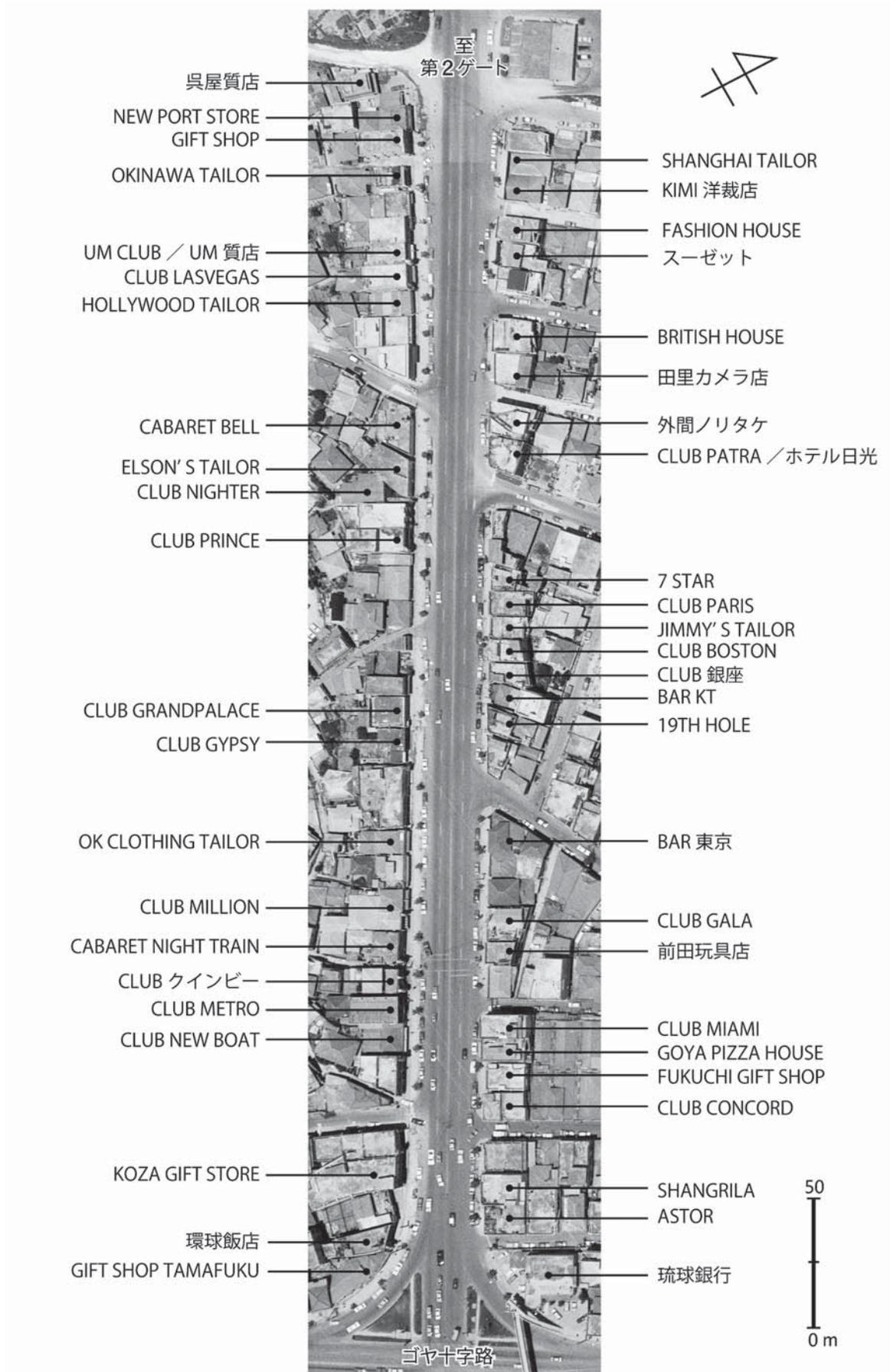
クラブと同様、米兵の利用するレストランもまた、A サイン制度にもとづく営業である。「GOYA PIZZA HOUSE」を例外として²³⁾、いずれもクラブとの併設である。このうち「環球飯店」の外国人顧客率は 30%と低く、交通繁華な胡屋十字路に近い立地でもあり、地元の利用者が大半をしめていたようだ。

ゲート通りは、一般に白人街（白人兵の集まる歓楽街）であるとされている。バーを経営していた女性によると、センター通りのクラブで飲んでから（閉店後に）ゲート通りに移動して食事をとり、そのまま朝まで飲む者も多かったという。したがって、営業時間は 24 時間であった。基本的に黒人が入店することはなく、またカントリーミュージックを嫌うため、流す音楽も白人向けであった。

開業年に目を向けると、「ASTOR」（CLUB ASTOR HOUSE）の 1955 年がもっとも古い。だが、『沖縄タイムス』（1958 年 1 月 26 日）に「近日開店」とあるので、実際の開店は 1958 年であると考えられる。この従業員募集の広告には、ウェイトレス 50 名について「容姿端麗英会話出来る方」、ボーイ若干名（18-20 歳）、バーテンダー 4 名は「英会話堪能社交的な方」とある。基地の門前商店街たるゲート通りにあっては英会話が必要であり、またサービス内容にともなうジェンダー分業も重要であった。この点については、他の業種においても注意を払うことにしたい。



第3図 ゲート通りの店舗復原



第4図 ゲート通りにおける主要な店舗の分布

(基図：1970年5月12日琉球政府撮影 10,000分の1空中写真 [国土地理院番号 MOK701-C2-7])

第2表 ゲート通りにおける業種別の事業所数

業 種	内 訳	件数		
		西	東	計
飲食店	クラブ・バー	15	13	28
	レストラン	3	4	7
	サロン	1	0	1
	その他	0	0	0
	小 計	19	17	36
時計店 ・ 質 店	時 計	2	4	6
	質	9	3	12
	カメラ	0	1	1
	その他	0	0	0
	小 計	11	8	19
衣料品店	仕立・小売	11	12	23
	刺 繍	0	1	1
	(製)靴	1	2	3
	小 計	12	15	27
土産品店		5	3	8
理容店 ・ 美容店	理 容	5	3	8
	美 容	0	2	2
	小 計	5	5	10
その他		9	7	16
不明		5	3	8
合 計		66	58	124

「事業所基本調査」などにより作成

[衣料品店]

飲食店に次いで多いのが、衣料品店の27件である。洋服店は「TAILOR」という店名にも示されるように、小売のみならず仕立てを行なう業者も多かった。だが、必ずしも自前で仕立てていたわけではない。

……外人の出入りの多いセンター通りやゲート通りには、△△テーラーショップと横文字の看板をかかげた洋服屋が目立って多い。……

洋服屋といっても背広の仕立てはほとんど香港。香港の洋服屋と提携、沖縄で注文をとってそちらに仕立ててもらおうという仕組みである。

香港テーラーにオーダーした背広は、飛行機で運ばれてくるのだが、注文してから二、三日〔の〕うちにはもうちゃんと仕立てられてくる。それでも香港オーダーの背広は、米本国で仕立てるよりずっと安あがりするそうで、家族のものも一緒に数着の背広をオーダーする顧客もいるとか
……²⁴⁾

経営者のなかには、インドや香港の出身者が含まれていた。英会話ができたのだろう。たとえば、「ELSON'S TAILOR」を運営していたのは、インド人である（1970年時点で40歳）。1960年には店舗広告が出ているので、開業年もその頃と考えられる。また、同店の新聞広告には「英国製（24時間仕

上) 高級紳士背広服」とあり²⁵⁾、英国領であった香港で生産されていたに違いない。1970年当時は営業していないのだが、「ASTOR」(CLUB ASTOR HOUSE)の経営者であるKHが1950年代に開業した「GRAND TAILOR」では、「香港一流の仕立！」(10日間で仕上げ)と宣伝していた²⁶⁾。

従業員にも特色があった。『琉球新報』(1973年4月6日)に掲載された「ELSON'S TAILOR」に勤務する女性へのインタビュー記事によると、「紳士服の裁断師はほとんどが男性で、女性の裁断師は少ない」といい、彼女は「裁断師も職人カタギがあって技術を習得するのに苦労しました」と応じている。

他方、「シャープ洋服店」の新聞広告では、「女店員 多少英語会話できる方」と募集していた²⁷⁾。業種を異にするが、「バンビー刺繍店」の場合も「刺繍経験者及女店員 英会話出来る方」というように²⁸⁾、技術者(職人)は男性に特化している一方、外国人(米兵)を接客する店員には英会話のできる女性が求められていたのである。

[時計店と質店]

「質店、スーベニアはAサイン・バー、レストランなどのはなやかさのかけにかくれて地味で目立たない存在だが、中部の経済に果たした役割りは大きい」²⁹⁾と指摘されるように、コザにあっては質店もまた、基地経済の受け皿となる代表的な業種のひとつであった。独特なのは、「質屋と言っても、コザ、金武など外人相手の『パーウン・ショップ』は、90%以上の商品が、日本製の時計、カメラ、宝石など新品を扱って」いたといい³⁰⁾、各店舗の商品をみると、時計・カメラ・ラジオが売り上げの上位3品目を占めていた。

1966年10月に新築開店した「日光時計」の経営者は、コザ十字路(照屋)に「比嘉時計店」も経営しており³¹⁾、コザ市内の別の繁華街に店舗をかまえる場合や、同じ通りに親族が同業種の店舗を出すことも多かったようだ。

[理容店・美容店]

コザ市内ゲート通りは、市内でも一番理容館が多いところで知られている。嘉手納基地第二ゲートをかかえ、そこから吐き出される米兵たちが、週に一回、あるいは二回と、市内のバー街へ出かけるオシャレ^{ママ}の場として利用されてきた。

理容館はゲート入り口からわずか百歩しか離れてないところに、セブンスター、パリ、シスコ、ローズ、コロンビア、ゲート理容館、グリーンとおみやげ品店や質屋、バーと肩を並べなんと八軒も数えられ、どの店も九〇%以上が外人相手。³²⁾

基地経済を代表/表象する業種、そのひとつが「理容館」(=床屋)であった。この引用文中にある「GATE 理容館」(西7)、「CISCO 理容館」(西17)、「PARIS 理容館」(西29)、「COLUMBIA BARBER SHOP」(西56)、「ROSE 理容館」(東8)、「7 STAR」(東19)は、**第3図**のなかに確認することができる。

列挙された店舗の外国人顧客率(1970年)についてみると、GATE 理容館100%、CISCO 理容館100%、ROSE 理容館100%、COLUMBIA BARBER SHOP 80%と(その他は不明)、ゲートからもっとも遠いCOLUMBIA BARBER SHOPをのぞけば、すべて100%であった。

ROSE 理容館を経営する夫婦へのインタビュー記事があるので、参照してみたい³³⁾。経営者の OK (1970 年 40 歳) は、十代に郷里の奄美大島を飛び出し、二年間、那覇の国際通りに立地する理容館で従業した。おそらく 1950 年代前半のことだろう。その後、同じく那覇の泊エンジニア部隊で軍の理容館に勤務していた同業の女性 (1970 年 45 歳) と結婚する。

二人は結婚を機に、わずかな自己資金でゲート通りに店を構えた。店舗といっても、バラック同然の建物であったといい、理容椅子も 4 台しかなかった。当時、ゲート通りはまだ「原っぱ」のようなところであったものの、近くに同業者が少なかったことから、営業は順調であった。1950 年代後半から 1960 年代前半にかけては客入りもいっそうよくなり、建物をコンクリート造りに改築して拡張するとともに、椅子も 12 台に増やして、12 人の従業員を雇用するまでになる。椅子 1 台に理容師 1 人がつくのであるから、よほど繁盛したのだろう。

その理容師の存在にも、基地都市の特性があらわれる。

コザ市内に理容館が七十余軒。外人兵の出入りの多いゲート通りには、外人専用の理容館が、五軒で理容師はほとんど女性。ごつごつした男性の手で調髪されるより、しなやかな女性理容師にしてもらうのが気持ちいいとあって、外人兵も好んで女性理容師の多いところによりつく。³⁴⁾

このように、ゲート通りの理容師もまた女性に特化していた。たとえば求人広告は、「女職人 二年以上経験者」といったぐあいである³⁵⁾。また、39 人が出場した「第四回中部地区理容コンクール」では、1 位 (宜野湾)、2 位 (宜野湾)、4 位 (具志川) の上位入賞者がいずれも男性であるなかで、ゲート通りの「7 STAR」から出場して 3 位に入ったのは 24 歳の女性である³⁶⁾。同じく「7 STAR」から全国理容コンクールの代表に選ばれたのも、22 歳の女性であった (もう一人は那覇の男性)³⁷⁾。

その「7 STAR」の従業員は、10 名中 9 名が女性であり³⁸⁾、このことからすると、理容業はクラブとならぶ女性に特化したサービス業であったといつてよい。

IV センター通りとの比較

ゲート通りにおける店舗構成の特色は、同じく白人兵を主な顧客としていたセンター通りと比較することで、よりいっそう鮮明になると思われる³⁹⁾。そこで第 3 表に、両者の業種別店舗数をまとめた。業種それ自体はほとんど一致しており、異同が少ない。けれども、構成比についてみると、二つの商店街の違いが浮かび上がる。

まず注目すべきは飲食店であろう。センター通りにおけるクラブの 58 件は、ゲート通りの 28 件を大きく上回るとともに、飲食店全体の構成比はじつに 46.3% を占めている。ゲート通りが 29.0% であることを考えると、センター通りの方が明らかに歓楽的要素の色濃い街区であったことがわかる。ゲート通りのクラブ・バーは、2 階に入るのが 10 件、そして地階が 4 件と、半数は路面店でない。また、センター通りとは異なり、集積の度合いも低いように見受けられる。

時計店・質店も興味ぶかい結果となった。カメラその他を除くと、ゲート通りが 18 件、センター通りが 20 件となる。ところが、ゲート通りの時計 6 件/質 12 件に対し、センター通りは時計 15 件/質 5 件と、その比がそれぞれ 1:2 / 3:1 となって逆転するのである。両者に互換性があるとはい

第3表 ゲート通りとセンター通りの比較

業 種	内 訳	件数	
		ゲート	センター
飲食店	クラブ・バー	28	58
	レストラン	7	7
	サロン	1	2
	その他	0	2
	小 計	36	69
時計店 ・ 質 店	時 計	6	15
	質	12	5
	カメラ	1	4
	その他	0	1
	小 計	19	25
衣料品店	仕立・小売	23	12
	刺 繡	1	6
	(製)靴	3	3
	小 計	27	21
土産品店		8	11
理容店 ・ 美容店	理 容	8	4
	美 容	2	1
	小 計	10	5
その他		16	12
不明		8	6
合 計		124	149

「事業所基本調査」などにより作成

え、あまりに対照的な件数であるのだが、理由は不明である。

衣料品店も好対照である。仕立てと小売りはゲート通りがセンター通りの約2倍に当たる23件であった。刺繡業もゲート通りは「バンビー刺繡店」の1件であり、しかもここは「田里カメラ」の一面を利用した同族による経営である一方、センター通りには6件も立地している。立地件数におけるこの差は何を意味するのだろうか？（製）靴店が同数であることを考えるならば、ゲート通りにおけるテイラーの集積と、センター通りにおける刺繡店の集積とは、二つの通りの商業環境を考えると特筆されるべき差異であろう。

衣料品店全体の構成比でみると、ゲート通りが21.8%であるのに対して、センター通りが14.1%であり、仕立てをするテイラーの数はゲート通りがセンター通りの約2倍となる。ゲート通りは「ファッション・ストリート」としての性格を有していたものと考えられる。

土産品店については、ゲート通り8件（6.5%）とセンター通り11件（7.4%）とで大差がない。基地都市を象徴する業種のひとつではあるのだが、数の上では存在感がない。ただし、胡屋十字路の入り口に位置する「GIFT SHOP TAMAFUKU」（玉福商店）やセンター通りの「ほていや」に由来する「MIYAGI GIFT SHOP」、さらには「外間ノリタケ」など、これらはゲート通りを代表するランドマークであった。「喜友名ギフトショップ（KIYUNA GIFT SHOP）」は、現在の営業実態が不明ながらも、上階の「CLUB PRINCE」とともに現存しており、ゲート通りにあっては往時（すなわち1970年）の面影を伝える貴重な存在である。

理容店・美容店はすでにみたとおり、ゲート通りの代名詞ともいえるべき業種であった。これも数は少ないものの、センター通りの2倍となっている。他の業種と比べると、総じて狭小な店舗で、立地も分散している。

以上、主要な業種についてセンター通りと比較したが、物販とサービス業とに大別してみても、違いは明確である。すなわち、質店を含む時計店ならびに衣料品店・土産品店は、センター通りの38.3%に対してゲート通りは43.5%となる。逆にサービス業（飲食店・理美容店）だと、センター通りが49.7%であるのに対して、ゲート通りは37%であった。あるいは「おしゃれ」という点にも、ゲート通りの特色があらわれる。衣料品店・理美容店の構成比が約3割を占めているのだ（センター通りは17.4%）。

1970年前後に撮影された街頭の風景写真が「沖縄市戦後文化資料展示室ヒストリート」に多数展示されている。センター通りにずらりと並んだクラブのネオンサインが壮観だ。カメラマンたちの目は、この街路のナイトスケープに惹きつけられていたのである。他方、ゲート通りには個々の店舗の写真があるものの、街路を見通す構図の写真は少ないように感じられる。業種の構成は当然、景観に映し出されるわけで、強烈な印象をあたえるセンター通りと比較すれば、視覚的な特色は見いだされなかったのかもしれない。

V おわりに

ベトナム戦争が泥沼化〔、〕米兵の間にえん〔厭〕世ムードがまん延したころから、在沖米軍兵士の間にもヒッピースタイルの調髪が爆発的に流行、町の理容館に来る米兵の数も三分の一くらいに減った。ベトナム戦争のはじめごろはGIカットが定番、軍の身体検査もきびしく米兵は週一回、町の理容館に来たものです。ベトナム戦争で反戦思想が強くなり、軍当局としても軍紀をゆるめざるをえない立場に追い込まれているのでしょね。戦争はアメリカの風俗も変えてしまった。米兵だけでなく、この二、三年は沖縄の青年たちにも調髪が流行、こちらは商売あがったりですよ〔。〕⁴⁰⁾

1972年5月15日の復帰を目前にひかえるなかで、このように嘆いていたのはゲート通りで「ROSE 理容館」を経営するOKであった。1970年12月20日の夜半に発生した反米騒動（「コザ暴動」）も理容業の苦境に追い打ちをかけていたはずだ。

50年近く歳月の過ぎたゲート通りをいま訪れてみると、インド人の経営する衣料品店はいくつもあるが、理容店はひとつとしてない。転用された店舗の2階部分に「COLUMBIA BARBER SHOP」の文字が残るだけだ（第4図）。

そして現在、ゲート通りの景観を大きく変えることになる事業が始動している。西側における大規模な土地区画整理事業である⁴¹⁾。区画整理の対象地域は、ゲート通りに沿った約3.4²の土地で、中心市街地を活性化すべく「商業機能の強化」を図ることが目指されている。早ければ2019年度に着工し、2025年度には完成する予定である。

ゲート通りと中の町とに挟まれた帯状の一帯は、空間計画の間隙となってスプロール化し、現在は老朽した家屋が密集している。地形的にもくぼ地状となっており、細い水路もある。放置された



第5図 「COLUMBIA BARBER SHOP」の看板
(2017年1月23日撮影)

草木が伸び放題の、緑こき空間でもあった。

このスプロール地区と一体的な開発が進められれば、表通りも含めて、景観は激変するだろう。前章の末尾で「視覚的な特色」がみられないと述べたが、注意をはらってみると、実は西側に建ち並ぶ店舗群に、ある特徴があることに気付く。それは、独特の「コンクリート看板建築」とでも称すべきファサードで、一見すると2階建てのようにみえて、実際はファサードの上部が看板となって背景を隠しただけの平屋なのであった（2階・3階建ての看板建築もある）。センター通りには一軒しかない。

土地区画整理事業が進捗すれば、こうした建築文化の所産も消えてなくなるだろう。本稿における店舗復原がコザの文化景観に関する資料的価値を持つならば幸いである。

[付記] 本稿をまとめるにあたり、沖縄市役所総務部総務課市史編集担当の皆さまには、たいへんお世話になりました。記して謝意を表します。なお、本研究はJSPS 科研費 17K03264 の助成を受けたものです。

注

- 1) 東峰夫『オキナワの少年』（沖縄文学全集編集委員会『沖縄文学全集 第7巻 小説Ⅱ』国書刊行会、1990年、304-341頁〔原著は1972年〕、引用は321頁。
- 2) 三線や締め太鼓を使い、伝統的な衣装をまとって踊る、祖先崇拜の信仰にもとづく旧盆の行事。
- 3) なお、神社の鳥居前に形成される街区を指して、鳥居前町と称することもある。岐阜県南濃に位置する福束輪中のお千代保稲荷周辺には、川魚料理屋などが立地して、いかにも輪中らしい独特な町場となっている。
- 4) 藤本利治『門前町』古今書院、1970年。
- 5) 原田伴彦「近世門前町研究序説」、経済学年報31、1971年、1-86頁。
- 6) 須山聡「富山県井波町瑞泉寺門前町における景観の再構成——観光の舞台・工業の舞台」、地理学評論76-13、2003年、957-978頁。
- 7) 対象とする時期の妥当性については、別稿で検討している。加藤政洋「基地都市コザにおける歓楽街「センター通り」の商業環境——1970年「事業所基本調査」の分析から」、立命館文学649、2017年、134-161

- 頁。
- 8) コザにおける都市化の初期局面については、別稿で検討している。加藤政洋「コザの都市形成と歓楽街——1950年代における小中心地の簇生と変容」、立命館大学人文科学研究所紀要 104、2014年、41-70頁。
 - 9) 中部興信所編『中部商工名鑑 1962年』中部興信所、1963年、14-15頁。
 - 10) 前掲、中部興信所編『中部商工名鑑 1962年』。
 - 11) 沖縄市役所総務部総務課市史編集担当の所蔵する商工観光課『通り会関係書類 1961年度～1963年度』という綴りから作成した。
 - 12) 加藤政洋「戦後沖縄の基地周辺における都市開発——コザ・ビジネスセンター構想と《八重島》をめぐって」、洛北史学 16、2014年、50-69頁。
 - 13) 『琉球新報』1956年7月17日(夕)、『中部情報』1956年8月1日。
 - 14) 『琉球新報』1956年7月17日(夕)、『中部情報』1956年8月1日。
 - 15) 『琉球新報』1971年8月29日。
 - 16) 沖縄市企画部基地対策課編『基地と沖縄 昭和53年度版』沖縄市、1979年、15頁。
 - 17) 前掲、加藤政洋「基地都市コザにおける歓楽街「センター通り」の商業環境」。
 - 18) 波平勇夫「戦後沖縄都市の形成と展開——コザ市にみる植民地都市の軌道」、沖縄国際大学 総合学術研究紀要 9-2、2006年、26-60頁。
 - 19) 沖縄光文社編集室『最新産業住宅地図沖縄市』沖縄光文社、1977年。
 - 20) 『琉球新報』1972年2月1日。
 - 21) 菊地夏野「Aサイン制度のポリティクス——軍事占領期沖縄より——」、戦争責任研究 59、2008年、58-68頁。
 - 22) 『琉球新報』1972年2月1日。
 - 23) 1970年段階では確認できないものの、「1階が食事専門／2階がスナックバー（サントリ・ラウンジ）」であったという（『琉球新報』1971年2月20日夕刊）。
 - 24) 『沖縄タイムス』1961年4月6日。
 - 25) 『琉球新報』1971年1月7日。
 - 26) 『中部情報』1958年7月1日。
 - 27) 『沖縄タイムス』1967年7月15日。
 - 28) 『沖縄タイムス』1968年5月24日。
 - 29) 『琉球新報』1972年2月2日。
 - 30) 『琉球新報』1972年2月2日。
 - 31) 『沖縄タイムス』1966年10月2日。
 - 32) 『沖縄タイムス』1972年6月2日。
 - 33) 『沖縄タイムス』1960年2月11日、『琉球新報』1972年2月26日。
 - 34) 『沖縄タイムス』1961年2月16日。
 - 35) 『沖縄タイムス』1959年12月20日。
 - 36) 『沖縄タイムス』1960年11月29日。
 - 37) 『沖縄タイムス』1964年9月11日。
 - 38) 『沖縄タイムス』1965年1月26日。
 - 39) 前掲、加藤政洋「基地都市コザにおける歓楽街「センター通り」の商業環境」。
 - 40) 『琉球新報』1972年2月26日。
 - 41) 『琉球新報』2016年4月3日。

(本学文学部教授)

付表1 ゲート通り(西)の店舗構成

No.	店舗	開業年	外国人顧客率	備考
1	(書店)	1969	100	
2	ゴヤ質店	1963	99	
3	ビクターテレビ修理店	1967	40	
4	NEWPORT STORE	1967	100	
5	GIFT SHOP	1969	100	
6	OKINAWA TAILOR	1951	100	
7	GATE 理容館	1962	100	
8	SUZY'S PAWN SHOP	1965	100	
9	MODEST 洋服店	-	-	
10	GATE PAWN SHOP	1962	100	
11	UM WATCH STORE	1967	100	
12	UM CLUB	-	-	
13	伊波商店	1967	100	玩具店
14	CLUB LASVEGAS	1967	100	
15	HOLLYWOOD TAILOR	-	-	
16	大城製靴店	-	-	
17	CISCO 理容館	1967	100	
18	高良質店	1961	100	
19	MATSUDA 洋服店	-	-	
20	CABARET BELL	1962	100	
21	ELSON'S TAILOR	-	-	
22	CLUB NIGHTER	1960	100	
23	(コザオーディオ)			
24	長嶺質店	1960	95	
25	(CLUB DIAMOND)			
26	喜友名ギフトショップ	1968	100	
27	CLUB PRINCE	1967	100	
28	OLYMPIA 理容館	1967	95	
29	赤嶺質店	1960	60	
30	PARIS 理容館	-	-	
31	島袋質店	1959	95	
32	川根商事	1968	95	紳士服
33	上原商店	-	-	雑貨店
34	川井田洋服店	-	-	
35	JIMMY'S TAILOR	1961	95	
36	CLUB GRANDPALACE	1966	100	
37	(目取真質店?)	-	-	
38	BEER RESTAURANT RENDEZVOUS	1966	100	
39	CLUB GYPSY	1965	100	
40	RANEY' TAILOR	1960	90	
41	ネバダピンボール	1967	30	
42	O.K CLOTHING TAILOR	1960	100	
43	セントラルホール	-	-	スラグマ シン
44	MICHI JACKET	1965	100	
45	ラッキー時計店	-	-	
46	CLUB MILLION	1965	100	
47	おしゃれの店あい	1968	85	化粧品店
48	CABARET NIGHT TRAIN	1958	100	
49	伊芸レストラン	1963	100	
50	CLUB クインビー	-	-	
51	CLUB METRO	1969	100	
52	おみやげ品の店玉屋	1961	96	
53	CLUB NEW BOAT	-	-	
54	呉屋写真館	-	-	
55	呉屋質店	1963	50	
56	COLUMBIA BARBER SHOP	1958	80	
57	ゲイト玉突場	1965	60	
58	(不明)			
59	KOZA GIFT STORE	1968	100	
60	CABALET ROLLING	1969	100	
61	ゴヤ印刷所	1960	0	
62	SALOON KOZY	-	-	
63	CLUB BONANZA	1968	100	
64	環球飯店	1963	30	
65	CLUB MIDNIGHT	1968	100	
66	GIFT SHOP TAMAFUKU	1950	100	

付表2 ゲート通り(東)の店舗構成

No.	店舗	開業年	外国人顧客率	備考
1	(不明)			
2	SHANGHAI TAILOR	-	-	
3	KIMI 洋裁店	-	-	
4	FASHION HOUSE	-	-	紳士服仕立
5	屋良質店	1961	100	
6	スーゼット	-	-	
7	ヤスコ美容室	-	-	
8	ROSE 理容館	1958	100	
9	BRITISH HOUSE	1967	99	紳士服仕立
10	バンビー刺繍店	1968	100	
11	田里カメラ店	1963	-	
12	外間ノリタケ	1962	100	陶器小売
13	クラブパトラ	1968	100	
14	ホテル日光	1967	100	
15	沢岬質店	1964	50	
16	MICKY 洋裁店	-	-	
17	(不明)			
18	SUSIE'S TAILOR	1968	99	洋品店
19	7 STAR	-	-	理容業
20	CLUB PARIS	1964	100	
21	JIMMY'S TAILOR	-	-	
22	日光時計店	1966	99	
23	CLUB BOSTON	1966		
24	伊佐時計店	1960	50	
25	CLUB 銀座	1970	100	
26	BAR KT	-	-	
27	サラニー	-	-	洋服小売
28	CLUB NAPOLEON	1967		
29	19TH HOLE	-	-	
30	津嘉山時計店	1969	90	
31	比嘉商店	1955	50	食糧品店
32	桑江時計店	1955	90	
33	BAR 東京	1965	100	
34	ゴールドデン理容館	1963	50	
35	エミー	-	-	洋品店
36	(不明)			
37	はるみ美容室	-	-	
38	花城商店	1960	50	家庭用品店

39	ジョー(質店)	1969	93	
40	宮城製靴店	-	-	
41	CLUB GALA	1968	100	
42	前田玩具店	1962	95	
43	M T STORE	1968	100	電化製品
44	KELLY TAILOR	-	-	洋品店
45	ひろし屋	-	-	靴屋
46	CLUB MIAMI	1964	100	
47	GOYA PIZZA HOUSE	1962	100	
48	FUKUCHI GIFT SHOP	1969	100	
49	GOYA GAME ROOM	1968	80	
50	CLUB CONCORD	1964	100	
51	島田スタジオ	-	-	
52	シャープ洋服店	-	-	
53	MIYAGI GIFT SHOP	1969		
54	SHANGRILA	1968	100	
55	STEAK HOUSE	1968	90	
56	M. M. STORE	-	-	衣料品店
57	CORAL INN	1970	99	飲食店
58	ASTOR	1955	100	バー

The Commercial Environment and Composition of Shopping Street in Front of the Gate
of Kadena Air Base, Koza

by
Masahiro Kato

Koza (present-day Okinawa City) is what one would call a typical military base-centered city; this paper reconstructs the consumer's landscape of shopping street in front of the second gate of Kadena Air Base. In the local this street is called "*Gate-Dori*" (gate-street). Its landscape and commercial composition shows directly and spectacularly so-called "the military-base economy", because of its location.

In this paper reconstructs all shops located in the "*Gate-Dori*", based on a statistical survey of commerce and industry. The basic sources are the *Basic Survey of Businesses* (including maps) and the *Report of the Basic Survey of Businesses*, both now kept at the Okinawa Prefectural Archives. These show the locations, owners, number of employees, major items (products and services), dates of establishment, and the nationality of customers. The "customers" section is divided into the three categories: "Okinawan", "tourists", and "foreigners". "Tourists" mainly refer to Japanese, and "foreigners" are almost certainly military personnel/civilians employed military and their families. As a result, this census enables us to get the percentage of foreign customers. The results of the reconstruction of landscape and the analysis show what constitute the military base economy.